

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 5月 第171号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

『命』と『命』をつなぐ霊柩車 —命より大切なものを運ぶ旅の終焉として—

故スティーブ・ジョブズ氏は、『自らの死を想うことの創造性』について、学生たちに向けて講演されています。人間社会は、死と向き合い命と引き換えに行う『判断と経験』を積み重ねて、思想や宗教を生み、科学や芸術を育み、進歩・発展してきたのだと思います。

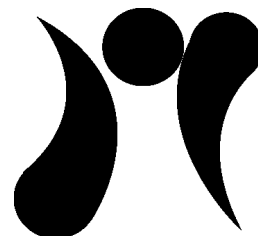
猿を初め野生動物は全て、老いて死期を悟ると群を離れ、土に還ります。それが「群」を護る本能です。しかしその「群」は遺伝子が伝える習性で動くのみで、千年経っても「群」でしかありません。人は、老いを感じて死期を悟ると、本能として仲間を委ね、看取りを任せます。人間の「群」は「社会」に進化し、更に発展してきました。社会創成の原点が『看取り』に在る、と考えるのが最も自然で妥当な帰結です。

一人ひとりの限りある命が、遺伝子でつながると同時に、看取りを通してつながり、千年～2千年と社会が変化しながら続いて来たのです。老いて最期を迎える暮らしには、『命』と『命』をつないで遺伝子では伝わる事のない社会性を伝える為の、『命より大切なもの』が潜んでいるのです。

老いを感じて自らの死期を悟る本能は、『死と向き合う吾身』を愛おしく想う心を養います。老いて死を予感しながらも懸命に生きる姿には『老いる吾身を愛しむ心』と、『今生きているのが嬉しいと想う心』を秘めています。その想いを鋭く感じ取る豊かな感性・感覚が、「看取り・弔い・偲ぶ」一連の営みを通して、『新たな命の誕生と成長を愛おしく想う母性や父性』を養い、社会を引継ぎ、歴史がつながって来たのです。自然の摂理と本能に添った『老いと死と看取りの営み』が、『新たな命の誕生と成長』を愛おしく想う本能に添った思想を養い、人間の社会と歴史が続く原動力となったのだと思います。

超少子・超高齢の社会に向かう今、老いた命を『看取り・弔い・偲ぶ』一連の営みを日常生活の中に取り戻す事が非常に重要です。地域包括ケアシステムは『老いた命が、看取りを通して、新たに生れる命をケアする仕組み』であって欲し

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

い、と願います。そして団塊の世代が後期高齢期を迎えた時、多くの子供達が誕生し成長する社会へと転換している事を、強く期待します。

これからも人間社会が長く続く為に、見知らぬ人の『葬送の列』に対しても『手を合せて弔う礼儀』をわきまえる社会を引継ぎたいと願います。「看取り・弔い・偲ぶ」人間ゆえの『思想と文化』を象徴するのが『霊柩車』であるように思い、誰にも一目で『葬送の車』と判る『霊柩車』が地域の中で命と命をつなぐ役目を果たすように感じます。人は死して『社会の礎』に成るのであり、葬送の車に手を合わせる『弔う心』が、自らの足元から発想して思考し、工夫して創造する『地方創生』の原点の様に思います。

せいりょう園 渋谷 哲

【せいりょう園待機者状況 平成27年5月8日現在】

○入所判定済み者 349人（グループの内）

Iグループ…113名 IIグループ…125名 IIIグループ…107名
【平成27年3月末迄の判定】
65点以上… 3名 80点以上… 1名 90点以上… 0名
【平成27年4月1日以降の判定】

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。Iグループが最も緊急性の高いグループとなっています。判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。

平成27年4月より、県の「入所判定マニュアル」の制度が変わりました。

判定項目は、 本人の状況（50点） 介護の必要性（30点）
 在宅介護の困難性（20点）以上3項目で判定します。

100点満点中、点数の高い方が入所対象となります。

但し、直接本人・家族に話を聞いて、入所の緊急性を判断します。

要介護1または2で、点数が65点以下の方は「非該当」となります。

但し、介護の必要性・在宅介護の困難性が高い場合には、特例入所の必要性が高いと判断します。

新人職員より



地域密着型特養 介護職員
登口 学

私が、せいりょう園で勤務して、1年が経ちました。入った頃は、利用者とのコミュニケーションをとるのが難しかったです。しかし、日々の生活を共に過ごしていくうちに、徐々にコミュニケーションをとる事が出来るようになりました。私が緊張して気を使い過ぎて話せなくなっている事とは関係なく、とても気さくに「そろそろ暖かくなってきたねえ」と季節の話がされたり「次のオリンピックはどこであるんや？」等の会話を利用者の方から話して下さり、緊張してまともな会話すらできなかった私にとってとても大きな助けとなりました。今では最初と比べて、しっかりと挨拶、日常の会話を行えるようになってきました。また介護を行っていくことにおいて、利用者の感情、生活のペースを知る事は、とても大切なものだとして理解でき、それを知るには日々の利用者の観察、会話によるコミュニケーションが必要だと分かりました。しっかりと利用者自身のことを理解出来ていないと、その人にとって、無理のある介護を行ってしまう事になります。

私が日々の勤務の中で、もっとも印象に残った事は入浴介助の際、頭・体を洗う時に、時間を気にしすぎて、自分の都合で介助を行ってしまい、利用者に「あまりゆっくり浸かれなかったね。もっとゆっくり入りたかったよ。」と言われた事でした。その人にとって楽しみの入浴を満足いくものにしてあげられなかった。ゆっくりとリラックスする時間を介護の効率の為、減らしてしまったと感じ、とても考えさせられる一言でした。その人ばかりに時間を使い、他の方の入浴介助がおろそかになることは当然ダメな事ですが、先輩職員の介護の様子を見ていると、しっかりと声かけ、入浴するまでの準備や段取り等で、とても上手く利用者が満足してお風呂から上がる様子を見て、私はもっと勉強し、満足度の高い介護を行っていかなければならないと感じました。

私がせいりょう園で働く前の介護のイメージでは、利用者がこれからすることを先に考えて、それを先に手助けする事だと思っていました。しかし、自身で車椅子を自走され、好きな時にエレベーターを使い、1Fと2Fを行き来し、居室に戻られて休まれたり、体調によって食欲がなかったり、お腹がすいてない方には食事を取り置き、時間をずらして食べていただく等、利用者自身のペースで生活されているのを見て、日常生活のほとんどを介護するという私のイメージではなく、あくまで自身で行えることは自身で行ってもらい、介助が必要なところだけを助けていくものだとしてイメージが変わりました。トイレ介助の際も、こちらで介助する前に利用者さん自身の足の力を使い、立位をとってもらい、失禁交換のときも体位交換を出来る範囲で本人にも協力して頂くといった、利用者の現存能力を使った介護を行わないと日常生活において、自力で行える行動を少なくしてしまおうのだと分かりました。

私が1年働いて、感じたこと、学んだ事を忘れる事なく、利用者や先輩から色々な事を学び、より専門的な技術・知識を身に付け、しっかりとケアを行っていけるように、これからも頑張っていきます。

『生涯現役で働けるような職場』として…

せいりょう園では、本人の勤務意欲と業務遂行能力があれば上限年齢はなく雇用の継続をしています。高齢者の持つ生活経験の豊かさが「介護の質の向上」に繋がると考えています。定年後に働く職員からの声です。



中野幸次氏 70歳
地域密着型特養
介助員(主に洗濯場)
8:45~17:45 勤務
平成17年7月~現在



働く動機

定年後、周囲に病気で亡くなる同世代の人達が居る中で、自分は元気で働ける状態であるのが有り難いと感じました。また当時は孫が生まれて間もないから、お爺ちゃんが元気に働く姿を理解して貰うまで頑張ってみようと思いました。

それと新たな仕事を取組む際に、「好奇心」と「興味」があった事も大きいです。何事においても大事な事だと思えます。

約10年近く洗濯業務をしています。一見単純作業のように見えますが、キレイに洗濯物を仕上げる。効率よく仕上げる。など色々と考えて行くと「奥が深い」ものです。

「奥の深さ」に関しては、どんな仕事や趣味にも当てはまります。理解すれば、物を大切に扱う事、謙虚さ、責任感も湧いてくると感じます。

働くメリット

お年寄りと接する中で数え切れないくらいの学びがあります。接していく中で、自分自身の未熟さを痛感する事もありました。客観的に人を視る目を養う事が出来ます。それは、子育ての際に、親が子供から教わるような感覚と似ています。成長させて頂いていると実感します。その日その日を臨機応変に頑張っています。

※中野さんは、認知症のある入居者の現存能力を生かして、共に業務を遂行しています。(写真参照)双方の理解と協力が必要です。中野さんは「接することで入居者より教わる事が色々ある。」と話がありました。中野さんと一緒に生き生きした表情で仕事する入居者の姿が、とても印象的です。

平成27年2月21日に、サービス付高齢者住宅「リバティかこがわ」で永眠された黒田操さん（享年106歳）のご家族より、御本人の句集を頂きました。伊丹三樹彦先生を師事して、人生の晩年を綴った俳句には、豊かな感性が随所に垣間見られます。今後、誌面で紹介させて頂きたいと思えます。

黒田 操 俳句集より

紅椿 落下は何か言いたげな

景桜期 写真の友は皆白髪

母の日 胡蝶蘭 私の胸で舞っている

花霞む 眼鏡のせいか 目のせいか

人生は戻せませんと 落椿



【せいりょう園空き情報 平成27年5月20日現在】

- ① ケアハウス：2室（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：1室
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：4室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【問合先】 せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433

第22回 木野雅之ヴァイオリン・リサイタル

平成27年6月27日（土）

18：30～ リバティかこがわ2Fにて開演いたします。

詳細内容は、別紙にて記載しています。

素敵なヴァイオリンの音色を感じて頂けたらと思えます。





仏教講話 5月11日(月)



真宗 大谷派 光念寺
本多 正尚 住職

デイサービス 谷澤 高明

激しい寒暖の差の影響か、ことのほか厳しく感じられた冬がやっと去り、日本人が待ちこがれる「桜」であったが、意地悪な雨と風のいたずらで、あっという間に散ってしまった。本格的な春の到来かと思っていたら、いつのまにか「立夏」になっている。南の海上に発生した台風が、何を勘違いしたのか日本をうかがっているらしい。季節がごっちゃになって時が流れているような気がする。デイサービス利用者さんのなかに、雪国育ちの女性がいる。送迎車の中で「最近はレンゲ畑が少なくなりましたね!」と声をかけたら「私、レンゲ畑を見たことないです」と。送迎中に目を凝らし、やっと探し当てた「レンゲ畑」の脇に車を停めて、見せてあげた。「わあー、きれいだね!聞いたことはあったけど、見たのは初めて。教えてもらえなかったら、ただの紫の草としか思わなかったやろね」。ご家族に話すと「わたしも、こちらに来るまで見たことなかったですよ」と言われていた。自分が小学生のころは、学校から自宅までの道の両側は田んぼばかり。それこそ『レンゲ、タンポポ花盛り……』。「麦畑」と所々にある「そら豆畑」の中を、道草しながら帰宅したものであった。私の部落は学校から一番遠い、小さな部落だった。今のように途中大人が立ってくれていたわけではなく、ほとんど一人で隣の部落の子とケンカしながらの帰路であったが、季節をしっかりと体感していたように思う。郷土の俳人滝瓢水の一句：手に取るな やはり野におけ レンゲ草

今月の仏教講話は、先月に引き続いて 真宗 大谷派 光念寺 本多正尚ご住職に来て頂いた。マイクを握られて第一声が、「ここのマイクは感度がいいですね」。先日ご子息が結婚され、披露宴を同寺でされたとか。その際、祝辞をいただくためにワイヤレスマイクの用意に奔走されたらしい。ここで仏前結婚の様子を少しユーモアも交えて話された。そして以前、お知り合いの結婚式で北陸の方へ行かれた折、披露宴で琴の演奏があったのだが、途中琴の糸が切れた。こんな時、よく「縁起が悪い」という。

ここから縁起について話された。人は縁あってこの世に生を受け、縁によって如来さまの命をもらって生きさせてもらっている。命尽きたら、如来さまのもとへ帰って行く。これは大きな海のように思える。海に風があれば波が起こり、波は漂いながら最後に浜に打ち上げられる。そして又、海へと引いていく。人の一生は波の如くである。波にはいろいろな波があるが、一般には波は消えやすいもの、はかないものに例えられる。こう考えると今、人がこうして生きている、生かされているということは大変なことである。どれくらいの人がかかわってくれているのか、どのくらいの人のおいがかつっているのか。もちろん人だけではない。あらゆる我々と接するモノのかかわりがあって生かされている。

こんなエピソードを話された。ある北海道に住むご住職。大変お忙しい方で、全国各地を飛行機で飛び回っておられる。世界に目をやると時々飛行機事故もおきる。その際、被害者の遺族たちが航空会社等に一斉に訴訟を起こす。それをみるとご住職は夫人に話されるとか。「私がそんな目にあったときは、決して文句を言ったり、まして訴訟を起こしたりはせんでくれ。

『長い間、大変お世話になりました』と、お礼を言ってくれよ』と。飛行機を飛ばすために（自分を目的地へ運ぶために）どれだけ多くの人がかかわってくれているか。大勢のいろんな人がかかわってくれてはじめて飛行機は飛べるのである。これは我々が食事を始める前に「頂きます」と念ずるのと同じである。口にする食材は、お金を払って手に入れたものであるから、誰に遠慮がいるものか。いや、そういうものではないでしょう。その食材が食材としてお膳に載るには、どれだけの人がかかわっているか。またその食材にも命があるとすれば、「食べさせて頂きます。今日一日を生かさせて頂きます」と、心をこめて頂きたいものである。最後に仏教の教えの中にある、深い思いやりの心：「無財の七施(むざいのしちせ)」の一つ、眼施(げんせ)「やさしい眼差(まなざし)で人に接する」について話された。エピソードも交えて話されたが、「目は口ほどにものを言う」というように、相手の目を見ると、その思いはある程度わかるもの。相手を思いやる心で見つめると自然にやさしい眼差しとなり、人は安心する。自らの目を通して相手に心が伝わり、相手も自分の気持ちを理解し、お互いが打ち解けることができる。

講話の締めはいつものように話された。「皆さんご自身の持っているモノ、経験してきたことを、生きざまを残していってください。そうすればいつか、あーそうやったなー、と思いたしてくれて、それが若い人たちの財産になるでしょう」。

ありがとうございました。次回の仏教講話は6月1日の予定です。

厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

5月の気候は朝と昼で寒暖差が激しく、体調管理に皆様気を使われたことでしょう。これまでは旬の野菜についてご紹介してきましたが、この度は通年おいしく食べられる野菜「かぼちゃ」についてご紹介します。かぼちゃは芋類の中ではビタミンA(カロテン)を多く含む野菜として知られています。ビタミンAとは人の身体の皮膚や消化管などの粘膜を健康に保つ成分です。消化管粘膜は身体の免疫に関与するととても大切な器官ですので、それが弱ると体調を崩しやすく、風邪にもかかりやすくなります。ですから、ビタミンAを多く含むかぼちゃは、人の身体を内側から強くする効果がある野菜です。かぼちゃは煮物や揚げ物・炒め物など、野菜の中でも比較的摂取しやすい野菜と思いますので、小鉢に一品として献立に利用してみましょう。





『料理を楽しむ教室』



平成 23 年 9 月より、月に1度、男性介護者や男性職員の為の料理教室を行っていました。途中で途切れましたが、平成 26 年 5 月より毎週金曜日に改めて料理教室を開始して、約 1 年が経過しました。約 60 回以上行ってきました。初めは「男性介護者の為の料理教室」として開催していましたが、回を重ねていく毎に、認知症のある高齢者、地域のボランティアの方々等が参加するようになりました。今後も「料理を楽しむ教室」として様々な皆さんとの繋がりを大切に続けていきたいと思っています。



日時 毎週金曜日 14:00~15:30 開催

場所 せいりょう園小規模多機能ホーム

「輝きの家ながすな」デイサービスホール

費用 500 円程度 エプロン・ハンダナ持参でお願いします。

※出来上がった料理は、少し試食して持ち帰っていただきます。

講師 藤本あや（せいりょう園職員、栄養士・調理師）

問い合わせ先 せいりょう園老人介護支援センター

TEL 079-421-7156【担当；入江】

気軽にお尋ねください。お待ちしております。

